

蝶の死骸

夏

陽炎の燃え立つ舗道に
蝶の死骸 ひとつ

ひらり、ふわり、

干からびた羽を 蝶番の如く
はためかせ、

その様を じっと、
じっと物陰から見つめる
少女の、眼

破れた体から流れ出した
体液のせいで
いつまでも焼かれている
その死骸を

いつだったか 私にも
そうして
ただ 見つめていた
ときが あった。

心の内で
崩れゆく何かの 音の予感に
震えながら。